

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

考証学の方法・直観と検証：『紫式部日記の新展望』の補訂をかねて

著者	益田 勝実
雑誌名	日本文学誌要
巻	20
ページ	2-8
発行年	1968-03-23
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019214

考証学の方法・直観と検証

——『紫式部日記の新展望』の補訂をかねて——

益 田 勝 実

はじめの蛇足

文献学にとっても、考証学にとっても、有職故実にとっても、日本文学研究のあらゆる領域で、新しい方法的検討が必要だ、とわたしは切実に考えていた。古色蒼然としているそれらの補助学（基礎学という人もあったが……）の方法の改革をぬきにして、新しい見方の導入だけによって古典文学の研究の革新が推進されていくのを、この上もなく不安に思っていた。

一 我々は日本文学の研究が、今や自らの手で変革して行かねばならない時期に達したと信ずる。

一 無立場な前問がその為に無力であるのは勿論の事、一つのイデオロギーの下に旧来の業績を一応素材とし、それらに方向を与へ、関係付けを施す事から、真に望ましい改革が出現すると考へる事にも、そのみでは賛成出来ない。

もっと根底から、もっと根底から、研究し直さなければなら

ない。

一 具体的に、飽く迄具体的に新しい日本文学研究の出版を準備する為、我々は相互の異った思想的立場を超えて、協同研究を突き進めよう。

それは一九四九年八月の『日本文学史研究』の創刊号以来、わたしたち同人が掲げつづけてきたスローガンだった。もとより、当時まだ東京大学の学生にすぎなかったわたしたちの声が、なにほどの影響力を持つはずもなかった。しかし、わたしたちは、当時最も進歩的な研究の推進力であった歴史社会学派に対して、こういう姿勢で批判しつつ、それに接近しようとしていたのだった。

なにが真に改革たりうるか？ 学問の全領域で、それぞれの分野ごとに、そこで内蔵されている矛盾にめざめた、自発的な新しい方法的革命が進行して、やがてそれらがひとつの目標のもとに連帯せざるをえなくなる時、ほんとうの学問の生まれかわりがあるだろう。わたしはそう考えていた。

不幸なことに歴史社会的立場に立つ文学研究は、その後、そのような全領域にわたる幅をもつ怒濤のような変革のコースを進みえなかった。それから十七年たった昨一九六六年八月、わたしは、ふたたび歴史社会的文学研究の全領域における方法的革新の必要を唱えることになる。（『歴史社会学的研究』『解釈と鑑賞』三一の一〇、一九六六年八月）全領域にわたって新しい歴史社会的方法を打ち出すことができるかどうか。それが歴史社会的立場に立つ文学研究の生命を制するに違いない。わたしはそう信じている。

問題を訓詁・考証の領域に限っていえば、わたしは、その分野で方法の革新について論じることなく、戦後のいわゆる進歩派の研究が進められたことを、この上もなく残念に思う。恥ずかしくさえ思う。進歩というものは、学問の場合、新しい観点を樹立することにとどまらず、新しい方法体系の確立でなければならず、トータルな革新でなければならない。古典文学の研究で、字句の解釈に拘泥し、内容の考証に腐心することが軽視されたのは、どう考えても、学問の根底からの改革に有利ではなかった。問題は、字句の解釈に拘泥し、内容の考証に腐心することの当否ではなく、いかに解釈するか、なにを考証するかの方にあるはずである。解釈・考証の最近のわたしの方法が比較的是っきりと出ているのは、作品の本文の解釈、そのための考証という方面では、『源氏物語』『桐壺』の本文についての、「絶望と絶望のその先と」（『解釈と鑑賞』三〇の八、一九六五年七月）や「帝王の生き方——古代貴族生活史と精神史の境界域から——」（『解釈と鑑賞』三一の一三）ではないか、と自分では考えている。また、文学そのものの成立する基盤としての、時

代の人間精神のありようの考証という方面では、古代末の説話文学のひとつの重要な側面とかかわりあう時代精神の動向を掘りあてようとした、「フダラク渡りの人々」（西尾実・小田切秀雄編『日本古典文学新論——近藤忠義教授還歴記念論文集』一九六二年二月）や「偽悪の伝統」（『文学』三二の一・一九六四年一月）などかもしれない。わたしの考証学的領域での方法について、その特色をどう捉え、その弱点をどう暴露するか、ということになると、現時点では、それらを相手どってなされることが、本人としては望ましい。

それはそれとして、考証学の方法について述べるのならば、やはり具体的に作業をすることによって、その責を果たしたい。

もうずいぶん以前のことで、しかもガリ版手刷のみじめなものであるが、わたしに『紫式部日記の新展望（上）』（一九五一年八月、日本文学史研究会）という一冊の本がある。あれは池田亀鑑先生の『紫式部日記』の二年継続された演習のレポートの一部であり、そういうものをあつかましくも外に持ち出して人の眼に入れたことも、貧乏のどん底で紙も碌なものが買えず、百部ばかりの本ともいえない貧相な本にしたことも、その後恥じに恥じつづけている。そこでわたしが新しく提出した幾つかの解釈・考証は、その後、秋山虔氏の『紫式部日記』（『日本古典文学大系』一九五八年九月）などにも、注に採用され、さいわいに流布して、新たにことごとしくいふ必要はもはやないが、そういう注では何分にも考証の過程が省略されてしまふはかないのが、やはり困る点である。そればかりではない。あの本以来、荏苒、歳月を経て、わたしが論証すべくして跳

躍していた点、誤った考え方をしている修正すべき点、新たに考証したくなった点もしいに多くなってきた。いつかはそれをまとめてみたい、と考えているが、ここでは『紫式部日記』の二、三の箇所の補訂を試みる形で、その当時の自分の考証方法を批判したい、と考える。

『紫式部日記の新展望(上)』補訂

たちながらぞ、たひらかにおはします御有様、奏せさせ給

ふ(寛弘五年九月十一日)

わたしは、この『新展望』の仕事を進めている頃、非常に直観的に判断し、演繹的に考証していこうとする傾向を持ちすぎていた。もとより、いまでも、考証は帰納的なものであるとは考えながらも、その帰納法を方向づけるものは直観——当時の史料に埋没しては現代に立ちもどり、また埋没して、執拗に往反するなかで、その時代人の思想・感情を、現代人として、共体験的に、同時に批判的に、二重構造で体得しつつけることによって、いつか獲得できる直観——である、とは思っているが、当時のわたしは、証拠よりもなによりも、自己の中に蓄えられた(平安時代的なもの)〈(平安時代的思考)と(平安時代的感情)〉によりたのむ傾向が強すぎた。そのため、いったん、難功不落の箇所の解釈が通じたとなると、それ以上の精査を止めてしまう傾きがあった。検算はしなかったのだ。

たとえば、

内より御佩刀はかしもて参れる頭中将頼定、今日伊勢のみてぐらつか

ひ、かへる程のぼるまじければ、たちながらぞ、たひらかにおはします御有様、奏せさせ給ふ。

という古来の難所にしても、『紫式部日記釈』(清水宣昭)が、「かへるは誤なるべし。其故はけふ九月十一日にて(伊勢奉幣使が——稿者補入——)内裏をまかる日なればなり」といつているのに対して、なんで誤謬なものか、「かへる」は土御門殿への勅使頼定が内裏へ帰ることと、「伊勢のみてぐらつかひ」の帰京までなどの意ではない、とわたしは考えた。その理由はいえば、「たちながらぞ、……」を「さて産室の触穢を憚りて、殿の上にも昇らで、立ちながら御使あるなり。すべてけがらひたる所にても、着座せねば穢れぬ由、延喜神祇式拾芥抄などに見えたる如し。」(関根正直『紫式部日記精解』)というふうに解くそれまでの諸注が、当時の史料を省みない、文字づらに頼っての解釈であつたからである。伏見宮旧蔵本『御産部類記』の当日条の記録には、明らかに、

頭シテ中将ト為ニ勅使ト持ニ参リテ御劔ヲ納メ裏ナリ候ス御簾前ニ敷ク茵ヲ左府相逢。

とあり、勅使頼定が産殿に昇り、新生皇子の御簾の前に敷かれた茵しとねの席に着いた、というのと舐触するではないか。わたしは、そういう当時の史料を重んじない解釈を認めなかった。

さらに、日ごろ、自分が平安時代の公卿の日記を読んでいて、「乍な立ち」には、触穢を避けるために穢れのある所で清浄な人が立ちながら用をすます場合と、逆に触穢の人が穢れを伝えないために清浄な所で立ちながら用をすます場合があつて、ここでは後の方であることを知っていたからである。

わたしは、だから、こう読み解いた。

内裏より御劔を持参した頭中将頼定は、今日は伊勢例幣使（発遣日）で、（彼はここで産穢に触れたので、）内裏に帰っては殿上する事が出来ない故、立ち乍らで天皇に中宮御安産の御有様を奏上する様、道長が頼定に申される。

これは大局的に見て、いまでも正しいだろう。しかし、当時のわたしの論証過程は、(1)勅使頼定は、土御門殿に来て殿上に上り、席に着き、実際には穢れに触れている。(2)そもそも、「乍立」ものい場合合は二通りあり、これまでの注は、そのひとつの場合しか考えていない、だから、事実にもあい、『日記』の表現とも矛盾しない解釈を下せばこうなるはずだ、というのであった。理詰め一辺倒でしかない。

こういう理で押す書生っぽの考証は、ほんとうにそうか、頼定は内裏に帰って「たちながら」奏上したか、と問われると、そのはずだ、と答えるだけのことであった。ところが、実はもっと重大な掘りどころとなる史料があり、当時のわたしも、その本は何度も見ていたはずであった。『山槐記』治承二年十一月十二日の皇子降誕の条には、ちゃんと、

先是申終剋許也。被奏皇子降誕由。御修法結願之後、被奏之。可及暁天。仍先参内。帰参之時、於近辺暫相待。結願参入可宜之由、予所申行也。権亮維盛朝臣右少将也、於北面方奉内大臣命参内、閑院。伝聞、立西洞院西南門、左衛門陣也、権亮問予、可立門外之由諷諫之。依為新嘗会以前、内裏不可穢之故也。寛弘五年九月十一日、一条院生給、頭中将頼定立陣外、令蔵人奏之、存彼例也。後日権亮曰、亮為御使参内、被召入朝餉壺、而我依汝命立門外。其

儀参差如何。答曰、於内之儀者不存事也、先例依立陣外、所申門外之由也云々。以隨身相尋職事。蔵人頭左中将定能朝臣出逢、奏皇子降誕給之由。頭中将帰入、付内侍奏聞。（『史料大成』）

とあって、安徳天皇生誕の時、この寛弘五年の先例が活用されたことがわかる。寛弘のおり、勅使頼定が道長の命に従い、左衛門の陣の外に立って蔵人に皇子降誕を奏上してもらった故実ののとり、『山槐記』の著者中山定親が中宮の権の亮平維盛にやはりそうさせたのである。

これによると、「かへる程のぼるまじければ、たちながらぞ、……」というのは、左衛門の陣の外に立って、ということであり、「のぼるまじければ」というのは、殿上しないどころか、内裏の地内に足を踏み入れないようにしなければならないことなのであった。「奏せさせ給ふ」の「させ」は道長が頼定に命じたことを意味するものの、「奏す」というのは、蔵人によって奏することであった。以前のわたしは、勅使の頭の中將頼定が清涼殿の階の前に立って、庭上から立ちながら復命する姿を想像していた。絵巻の画家でなくてよかった、とも思う。定親がこの故実を、『御堂関白記』でも、『小右記』や『権記』でもない、どの記録によって学んだのか、知りたくもある。

いずれにしても、わたしのかつての推論は、こういう動かせない証拠によってようやく定着できる性質のものであり、そういうものでしかなかったのである。

かみのあらそひ、いとまसानし

(寛弘五年九月十五日)

この日記の五日の産養の夜のくだりに、

殿をはじめ奉りて攤うち給ふ。かみのあらずひ、いとまきなし。

という叙述があり、これは、それまで「紙の賭物を争ったり、いかにも無法に大人気ない。」(小室由三『紫式部日記全釈』)などと解釈されていた。それを、わたしは「上(「紙」を懸けた)の争ひいとまきなし。(お偉方の争ひは困り物。いけませんわね。)」と解いた。

子曰、君子無所^ハ争^シ。必也射乎。揖讓^{シテ}而升^リ、下^{リテ}而飲^ス。其争也君子^{ナリ}。(「八佾第三」)という『論語』の章句や。

上有^ニ三^ハ好^ム者^ニ、下^ニ必有^ニ三^ハ甚^シ焉^ニ者^ニ矣^{ナリ}。(「騰文公上」)

のような『孟子』の章句から、直観的に儒教的教養からきている、と判じて、「その上の争ひの非難さへもが何等実質的なものではなく、式部の機智乃至警句であるだけ、何時も隠さう／＼としながら、その意識の故にも常に馬脚を露した、紫式部の漢才の流露としてこの文を解する事はどうであらう。」などといっている。

わたしが少年時代これらの漢籍の素読をしていた、そのほんの勘に頼っての判断で、これなどは、手続きからいって、考証などといえる学問的なものではない。それでも、従前の文字をそのまま読んでの解釈よりは、紫式部の内面の心情に近づきうる、と思い込んでいたのであった。上(紙)の争ひはいけない。式部は本気で非難しているのか、機智を弄しているのか。——まことに赤面のいたりだが、自分で勝手にそう問いを発して、わたしはこうまくしたてている。

前の解に従って卒直に紙の争ひを蔑視する伝統への反逆児式部を認めるか、後の解を採り上げて伝統尊重の流の中で深い教養から発する機智を弄んでゐる彼女を把握するか。こゝでは解釈はもはや紫式部の人間性に対する全体的認識に助けられる外ない。何れを選んで解釈とするかは、この文章にとっては外的な要素に憑る外はない。ここに文字に頼る解釈の限界、死滅点がある。同時にそれは全体的・流動的、乃至は生命的な解釈の生起点でもあるのである。全体が如何様な現象を呈して居らうとも、こゝのみは反逆児としての彼女が表れてゐるのであるかも知れない。であるけれども、その永遠に真であるべき論理上の懷疑の可能が、具体的生命的全体に席を譲る所にのみ人間理解が成立する。

なんと浅はかな、怪しげな気焰のあげ方だろうか。『紫式部日記の新展望(上)』などという本は、いまではどこにも見あたらない代物だからよさそうだが、無念なことに「国語国文学研究史大成」の『王朝日記』(一九六〇年六月三省堂)には、この部分を含む一文が翻刻されていて、終生顔を赭らめどおしでいるほかない。活字にしてくださった秋山虔氏の友情を逆恨みしたくなるのは、慚愧のいたり、というべきか。

時代は少し遡るが、藤原師輔の『九曆』の天曆四年閏五月一日の条に、

東面^{おもて}南上^{ヲトシテ}、中務卿式明親王、太宰師有明親王、中納言兼左衛門督源卿高明、非違別当、参議大藏卿伴保平卿、左大弁源庶明、大江維明、太宰大式平、随時、右大弁源等来向^{リカヘリ}。五六巡後分^ス配^ス某手^ニ。親王^ニ三貫、納言^ニ二貫、参議^ニ一貫、殿上四位^ニ八百、五位^ニ六百、地下四位^ニ六百、五位^ニ四百。六百以下不^ラ預^ス之^ニ。件^ノ銭分配以前^ニ、

非違別当中納言退帰。依^レ畏^ニ法制^一敷。 (大日本古記 録)

とある。いよいよ攤をうって遊ぶ段になって、碁手の錢を分配することになると、檢非違使の別当である源高明が席をはずした、というのだ。取り締まる立場にある者が博奕の座にいては、いくら儀式行事化している遊戲であれ、やはりまずいのである。師輔は、「法制を畏るるによりてか。」といっている。

この「紙の争ひ」(この場合は、碁手は錢でなく紙だった。)を「まさなし」とする意識は、紫式部ひとりのものではなく、その遊びに加わっているものに伝統的に保有されていたものなのだ。天曆の昔からそうなのだ。式部は、それを汲み上げて、「上の争ひ」としゃれのめしたのにすぎない。あくまで機智を働かしただけで、ひとり白眼視して咎めているのではなかった。

この文章は『九曆』の逸文で、伏見宮の『御産部類記』(宮内庁書陵部現蔵)に「九条殿記」として引かれているもの。以前の「続々群書類従」本『九曆』にはなかったが、こんどの「大日本古記録」には採ってある。それを読んでいて、はじめて気づいた。以前にも、これは『大日本史料』一の九に引かれていて、何回か読んだはずなのに、見れども見えずであったのだろう。

『新抄格勅符抄』(「新訂増補国史大系」)には、長保元年七月廿七日の太政官符を収めている。

一 応^ニ重^ニ禁衛^ニ制^ニ諸司^ニ諸衛^ニ官人^ニ饗宴^ニ碁手^ニ輩^ニ事^一

右、饗宴之制、明^ニ在天平宝字二年^一勅書、貞観七年昌泰三年格、延喜六年天曆元年延長三年永観二年符^一。綸旨頻^ニ降^ニ、炳誠重疊^一。而^ニ年来典法設^一而不^レ張^一。時俗習^ニ而不^レ謹^一、有^ニ力者^一

尽^ニ善^ニ尽^ニ美^ニ、自得^ニ衆望^一。無^ニ頼^ニ者若^レ存^ニ若^レ亡^一、独苦^ニ一身^一。世之蠹害、尤^ニ在^ニ此事^一。同宣奉^ニ勅^一、自今以後全^ニ以^ニ停止^一。若乖違^ニ有^ニ犯^一、見聞不^レ糾^一之人、非^ニ可^ニ寬恕^一。罪同^ニ先格^一。

とある。諸司・諸衛の官人に宴席での攤をこれほどきびしく禁じており、しかも、見聞きて糾^ニさざる人もほおってはおかない、というのであるからには、上級者のかれらが公然と産養^ニの儀式^一の中でしているのは、奇妙な犯罪意識と特権的な解放感がこんがらがった遊びごとであったはずである。紫式部もそれをはっきりと感じとらずにはおれないのだろう。しかも、その機智に富んだからかい「いとまさなし」ということばが、その場で口にされたのではなく、日記を文字で綴っていく段階で飛び出してくることも、また、注目すべきことではなからうか。文字の世界の中では、彼女は、こういうふうに、上達部たちに対して優位を制することもできるのであった。

おわりの蛇足

これらふたつのことで提出した考証の補強の史料は、本来ならば、まずそれらの存在に気づき、それらを主軸に据えて考えていくと、従来の諸注のようでない、わたしの出しているような解釈にたどりつく、というはずのものであったのだろう。わたしが精査をおこたり、考証の途中での思いきった飛躍をおそれなかったために、本来ならば考定のための史料たりえない傍証的なものばかりで、推測を進めていたことになる。さいわいに、それは誤っていないから、これからのもの、考えてみるとおそろしくもなる。二十代のわたし

は、自分が人々のように後世の註釈書に頼って作品を読まないこと、古代の文学以外の諸史料でたえずなまの古代社会に触れていることに、いささかよりのむ心が強すぎた。考証というものは、やはり精密に論理の飛躍がないように、論理展開の要所々々を史料で堅めて行かなければならない。『紫式部日記の新展望(上)』のこのふたつの考証などは、実は仮想ないし予言にすぎなかったのだ。直観力が考証の学において重要な推進力となるべきことを否定してはならない、と考えるが、考証というものは、それだけではないものでもある。

しかし、こういう考証などに没頭する面でのわたしの仕事は、わたしのなかまである歴史社会的立場に立って文学研究を進めようとする人々の関心を買うことは、ついぞなかった。わたしの考証を引用したり、批判したりしてくれたのは、多くは旧来の実証主義の研究者であった。そこでは結果が主として問題にされる。考証の過程、いまだ考えられたことのない逆方向に解釈が固定されていくプロセスに参加する研究主体が、いかに〈平安時代の思考〉〈平安時代的感情〉を身に習い覚えようとし、同時にいかに現実的生活感情との矛盾・相剋に悩むか、主体を〈歴史的〉主体として拡充する企てが、同時にどのような危険をはらまざるをえないか、というようなことを反省してみようとはしないのである。そして史料を羅列しての単純帰納法だけを最大の武器としているのである。そういう常識的操作だけでは、何世紀にわたって読み解けない箇所が、突然読み解けたりするものではない。考証の武器はなお進取の学徒の手にわたらず、守旧の研究者の手中にあるが、守旧の研究者の旧態依然を笑いつつ、かれらはそれをふまえて立論し、しだいに、いわゆる実

証のまゝにひざまづかされて行きつつある。実証を排せず、いかなる実証か、なんのための実証かを問う、新たな実証の精神こそ大切なのではなからうか。

——本学日本文学教授——

役者、国宝となる

三人の歌舞伎役者——尾上多賀之丞、尾上梅幸、中村歌右衛門が、人間国宝に指定されたときいて、いささかビックラした。役者が国宝だなんて？ ちゃんちゃおかしい。そんなものは、役者にいりやしないんだ。いらないうんと、もらえんもののヒガミと聞こえるかもしれないが、オカミのはくづけに嬉こんでいるようじゃ役者もおしまいだ。むかしの役者や見物衆がこれを聞いたら、草葉のかげでなげくこと受け合い。役者も地に落ちたなあと、云うことだろう。

もし役者がなにかもらうとしたら、それは見物衆からのものだろう。それがなんであるかは別問題として。おそらく、具体的なモノではあるまい。役者に精進が大切なのはあたりまえだが、それを見守り、育てていくの見物衆の目ではなからうか。もつとも、見物の目の質が落ちてきている昨今では、それを望むのはむりだと云ってしまえばそれまでではあるが……。人間国宝になったからと云って、テングになり、一枚歯の朴歯を踏みはずすようなことはしてもらいたくないものである。

(と)